解　題

中島裕喜（南山大学教授）

浜本昭市氏オーラルヒストリーの第2回インタビューは2023年4月15日（土）に京セラ株式会社稲盛ライブラリーにて実施された。第1回までの内容に続いて、第2回ではサーディップ・パッケージの実用化、マルチレイヤー（セラミック多層）パッケージの開発量産化、また切削工具「セラチップ」や再結晶宝石「クレサンベール」などの商品開発、さらに京セラ興産やホテル京セラなどのサービス事業に従事された時期のお話を伺った。

サーディップ・パッケージの技術導入と生産では、フェアチャイルド社からの技術導入があったことはすでに知られているが、それ以前の時期から社内で独自に生産方法を模索し、生産設備も自製していたことが語られている。導入技術との違いはバインダーのみであることが判明すると、京セラではこれまでのスプレー法よりも生産性の高い印刷法の実用化に取り組んだ。この他、セラミックの量産の必要から２連のトンネル炉を考案して設置するなどの取り組みがあったことが語られている。同製品はその後、採算性の高い事業として成長していく。

続いて、京セラの発展史においてエポックメーキングな存在である、マルチレイヤー（セラミック多層）パッケージの開発量産化について詳しく語られている。川内工場の開設当初、浜本氏は滋賀工場の資材担当であったが、青山令道氏が選定した生産設備などを浜本氏が発注しており、新たに金メッキの工程が加わるなどの理由で大規模な新設備の導入があった様子が語られている。その後、川内工場に異動した浜本氏はセラミックテープの成形を担当したが、顧客から提示されるのは製品図面のみであり、生産方法については試行錯誤を繰り返した。顧客企業はアメリカだけでなく日本のエレクトロニクス企業から受注したが、日本の顧客はアメリカに比べると短納期を求めていた。なお浜本氏は現地採用の作業員が話す鹿児島の方言に苦労したが、稲盛氏は国分工場内に勤務する作業員に鹿児島弁の使用を禁止した。

浜本氏は京セラがセラミック技術を梃子に事業の多角化を進めた際にも当事者として活躍した。川内工場から滋賀に戻り、中央研究所部長代理として切削工具「セラチップ」、再結晶宝石「クレサンベール」などの事業化に尽力した。クレサンベールは稲盛氏による開発指示から実用化成功の段階を経て、浜本氏が製造を担当した。これにソーラーエネルギーとバイオセラムを加えた４事業を統括する商品事業本部でも本部長を務めた。

1993年からは京セラ興産、およびその子会社であるホテル京セラの社長を歴任した。京セラ興産の発足時はバブル経済の余韻が残る時期でもあり、ゴルフ場経営の話も出ていたが、浜本氏の判断でこれを中止した。稲盛氏は社内異動でホテルのマネジメントに携わることになった社員に「心からの笑顔のもてなし」の重要性を説いたという。

以上のように、浜本氏のオーラルヒストリーは、製造現場の様子を中心に新たな史実に富み、また松風工業の時代から共に歩んできた稲盛氏への深い理解が基礎となっている。